

Artist In Residence Program 2011 Report In NASU

name 福島 かほり

genre 陶芸

date 2011.7.9 ~ 9.3

profile

2006 多摩美術大学美術部工芸学科陶コース 卒業
2008 筑波大学大学院芸術研究科デザイン専攻 修了

〈展示会・入選歴〉

2008 筑波大学修了制作芸術研究科長賞 受賞
2006 「中村錦平プロデュース
：CLAY CONNECTION by FREETER」青山スパイラル
2008 「福島かほり展」ギャラリー山口
「アート・ジャム」ギャラリー山口
「前橋アートコンペ 2008」前橋元氣プラザ 21
「トッテのある形」多治見市文化工房ギャラリーヴォイス
2009 「Humoresque 展」登録有形文化財 市田邸
2010 「うつわ、うつわ、うつわ展」
Fujisawa Service Center Gallery
「フタのある形 Part II」
多治見市文化工房ギャラリーヴォイス
「第 10 回群馬青年ヴェンナーレ 2010」
群馬県立近代美術館
「Boundary layer 展」Art Lab Tokyo



▲滞在成果の作品

福島かほりさんの滞在

アート・ピオトープ那須 陶芸スタジオ
安藤 麻衣子

2011年度のレジデンス作家の一人として、7月3日、福島かほりさんという、陶芸作家が来館しました。福島さんは埼玉県在住。かつては高校の美術講師をしたり、現在も東京で陶芸教室講師を務めたりと、忙しい日々を送っています。仕事をしながら、地元では工房を借りて、日々の制作に励んでいるとのこと。

アート・ピオトープのレジデンスプログラムは、毎日集中して自由に創作に取り組むことが可能です。福島さんも、それに魅力を感じて応募された様子。都会からはなれた那須の大自然の中、ご自分のテーマである、人体をモチーフにしたオブジェ作品を作り始めました。

信楽から取り寄せた、粗めの粘土を用いて、紐作り技法で人物の頭や身体、骨や脳を作りこんでいきます。細かく作りこむ様子は、周りから見て尋常ではない雰囲気です。身体の器性について考える福島さん。土による人体モチーフ作品の表皮を、ある意味、器として捉えています。表皮を、外界と隔てる境界層として、内部のモノを包み込んでいる私たち人間。食べ物か器に盛られているように、表皮という器に私たちが包まれて(盛られて)いるようだ、と考えて、福島さんは人体を焼き物で作ります。複雑で難しいこと、人によっては理解し難いこと……。しかし、2ヶ月の真摯な制作風景を拝見して、作らずにはいけない作家の性(さが)が在ることを、強く感じました。

そんな中、滞在中盤では、「山のシュレー」イベントでの講師を務め、「手」を制作するワークショップを開催。参加者へ、じっくりと自分の身体を見つめること、それを土に置き換えていくことを伝えました。

滞在後半では、作品色付けに専念されて、陶芸制作としては今回は短い期間でしたが、「人体のオブジェ」や、「人体頭部のマトリョーシカ」などを無事に完成させました。確かな技術と経験によって、精巧な作品群が仕上がりました。福島さんの作品は、一般的オブジェの中でも、評価が難しく分かれる作品のようですが、素晴らしい技術と独特の精神性を併せ持った福島さん。きっとこれからも作り続けながら、自身を保っていくはず。作り続けるコトや作ったモノが、彼女と外界とを繋げるかけがえのない架け橋であり、少しでもここ、アート・ピオトープがその一端となれたことを祈ります。



▲滞在中のワークショップや創作活動等の様子

AIR プログラム終了レポート

福島 かほり

7月4日から9月1日まで、アートビオトープ那須でのレジデンス・にプログラムに参加しました。真夏とは思えない涼しい環境で、集中して作品を制作し、また那須の自然を満喫することができた二ヵ月間でした。アートビオトープ那須は、那須塩原駅から車で30分ほどの山の中にあり、7月中旬にはホテルが舞う小川や広大な畑を敷地内に有しています。近くには川遊びできる木ノ俣川や那須連山があり、茶臼岳登山を楽しみました。那須では、私が作品のモチーフにしているマトリョーシカの原型である箱根細工の入れ子や、今後の指針になるような本との出会いがありました。また、アートビオトープに集う方々と話す中で、今まで気になっていた物事同士が線繋がり、意味を持ちだし、作品制作において重要なテーマとなる発見がいくつもありました。山のシュールでは様々な分野で活躍している方々との出会いもあり、このレジデンスならではの貴重な体験ができました。そして、自然の中でゆっくりと考え、自作と向き合う時間を持てたことが大きな収穫です。期間中、アートビオトープや二期倶楽部のスタッフの方々には大変お世話になりました。生活や作品制作をサポートして頂き、思い出深い場所がまたひとつ増えました。本当にありがとうございました。



▲滞在中のワークショップや創作活動等の様子

AIR プログラム福島かほりを終えて

AIR ディレクター 富田勝彦

3年目を迎えるAIR公募プログラム、陶芸作家は2人目である。初めて“器”ではない作品を造るのが「福島かほり」である。生活用具としての器ではなく、むしろ現代美術寄り、現代美術として陶芸という表現を選択している作家である。それは、これまでの個展開催会場が、工芸を専門に扱う画廊ではなく、現代美術画廊を選んでの作品発表にその意思が表れている。これまで、AB那須で滞在制作（これがAIRの意味である）した陶芸作家の多くが“器”作家であったので、その振りが広がったことは喜ばしい。

「陶芸で体形を作る」作家はあまりいない。それは「信楽の狸」というあまりにも有名な型があるからかもしれない。多くの作家は「***と似ている。***見たい…」と言った批評を嫌うのだ。鑑賞者にそれとは違う、オリジナリティーを伝えることの難しさをどう克服するかに苦勞し、それができて作家の個性として認知される。福島は、むしろ彫刻家の作る身体との境界を模索しているのだろうか。

いつも、AIR公募プログラムに応募頂きプログラムが内定してから、作家と会って話をし、ワークショップ内容の打ち合わせ、プログラム中の制作についての話をするのだが、福島と会った時に、この模索を感じた。「“いりこ”状の形体を作りたい。ロシアのマトリューシュカ人形のような…」と言っていた。「マトリューシュカ」は民芸人形。「信楽の狸」「だるま」・・・作家が埼玉県鴻巣に育ち、幼少時から「高崎だるま」「越谷だるま」が身近にあったこと、原風景の影響がみられるのではないか。多くの美術家にとって、創作のこだわりは原風景がベースにあるといって過言ではない。福島も同様であろう。

今プログラムでの成果、大作「マトリューシュカ」は、個々が器にもなる。私は、それよりも「nestle」「妄想沈下（2個）」「to sink」といった作品に、単一の形態でなく“柔らかく融合する”合体を見る。奇しくも同時にプログラム実施した舞踊ユニット「86B210」との感性の響きあい。私がプログラム開始前より楽しみにしていた“場の刺激”が、成果になって表れたものと評価する。陶芸の違った方向を模索する福島かほりから、しばらくは目が離せない…



▲滞在中のワークショップや創作活動等の様子